

# 近距離コミュニケーションこそ

## 「ヒト」を人たらしめている要因

私は電車で通勤しているが、この数年、駅や電車の中の風景は大きく変わったと思う。かつて、ゲーム機やスマホなどに夢中になることは若者の専売特許のようなものであった。ところが、今や老若男女を問わず、画面をのぞき込み、忙しく指先を動かしている。それぞれが非常に近くに座り、あるいは立っているのだが、相互の関心は皆無

という。先日、優先座席に座りながらスマホに夢中になっている複数の若者の前に、お年寄りとおちゃんを抱えた女性が立っている場面に出くわしたが、その存在は彼らの視界には入っていないかのようであった。こうした状況に苦言を呈したいわけではない。これも氷山の一角と諦める前に、われわれがどのような時代の中

### 小原 克博

同志社大学 良心学研究センター長



で生きているのかを、時々立ち止まって考えることは大切だろう。社会の近代化の中で「より遠くへ、より速く」という価値観が尊ばれ、交通網だけではなく、通信技術が目覚ましく発展し、世界は小さくなっていた。遠距離コミュニケーションの革新の恩恵は計り知れない。

しかし、「ヒト」が他者と向き合つて、その顔の表情を読み取り、感情を共有し、必要な手助けをするように進化してきた歴史は、数百年どころの話ではない。長い進化のプロセスの中で獲得してきた近距離コミュニケーション

こそ、ヒトを人たらしめている要因であるといつてもよい。人間のように、顔の表情一つで微細な感情を分かち合うことのできる動物は他に存在しない。日本では、人と人の間の繊細な感情のやりとりを土台にして、人と動物や自然との間のつながりの意識も繊細な形で育まれてきた。自然の事物の中にも表情を読み取るうとする感覚は、日常的な近距離コミュニケーションがあつてこそ成立するものだろう。あるいはインターネットでもかなわない、先祖との交流といった遠距離コミュニケーションも、やはり家族の親密な交わりの中に基礎付けられてきた。

急速な変化の中で、人の顔を見ないで済む遠距離コミュニケーションだけが一方的に拡大すると、どうなるのだろうか。たとえば、遠隔操作によって人を殺害することのできるドローンは、この時代の副産物であるだけでなく、それは私たちのもう一つの顔でもある。

人の顔に表れる不安や喜びを受け止めることのできる共感の能力、電子ネットワークのただ中にありながら、大地や自然の息づかいを感じることできる身体性。新年にあたって確認すべき事柄は身近にある。



◎こはら・かつひろ  
1965年、大阪市生まれ。同志社大大学院神学研究科博士課程修了。博士(神学)。一神教学際研究センター長(2010-15年)、京都・宗教系大学院連合議長(13-15年)などを歴任。現在、同志社大神学部教授、良心学研究センター長。専門はキリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。『宗教のポリテクス—日本社会と一神教世界の邂逅』ほか著書多数。